

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 今井 悠介

本論文は、形而上学の成立史という問題意識を背景に、17 世紀の哲学者ルネ・デカルトの形而上学の構造と特質を、近世的な存在論の系譜、とりわけクラウベルクの存在論との対比のもとと解明しようとするものである。

第1部は、本論文全体の準備的作業として、デカルトならびにクラウベルクと存在論との関係の概略の解明(=第1章)、ハイデガーからマリオンへと引き継がれた有力な解読格子としての形而上学に纏わる「存在-神-論」解釈の検討(=第2章)、クラウベルクの背景となる近世的な存在論の系譜の素描(=第3章)、を行う。いずれも、本論文全体への準備作業だが、密度の高いものである。

第2部は、クラウベルクの存在論の構造を分析する。その主著『オントソフィア』の三つの版の丁寧な分析を通して、クラウベルクにおいて、デカルト主義の影響を受けて、近世的な存在論からの離反が見られること(=第4章)、矛盾律と第一原理の優先性に関して、矛盾律の優先性が拒否されていること(=第5章)、以上の解明を受けて、クラウベルクの存在論の体系構成に関する仮説を提示する(=第6章)。学の主題である「知解可能なもの」に、スアレス由来の「原因からの論証」を適用し、その属性を次々に導出していくことで「存在論」を体系化した、というのがその仮説である。以上は、少なくとも本邦においては初めての本格的なクラウベルク研究として高く評価することができる。

第3部は、クラウベルクの存在論と対比させることでデカルト形而上学の構造と特質を解明する。両者における「或るもの(aliquid)」の位置づけの違いの分析(=第7章)を経た上で、「第三省察」における神の存在のアポステリオリな第二証明の議論、とりわけ私と「無限の観念」の関係、および「無限の観念」と神の力能の関係を重視して検討した上で、「第六省察」冒頭の「第二の明証性の一般規則」と申請者が呼ぶ議論に至るまでの一連の論証を辿り、私-無限の観念-神-諸事物という一連の構造からすべての存在者について論じることを可能にするという、デカルト形而上学の独自の構造を摘出する(=第8章)。さらに、クラウベルクとデカルトの形而上学を対照させ、「学の主題」自体の普遍性を元に学の普遍性を担保するクラウベルクと、一連の「学の主題」の候補が織りなす全体的構造を元に学の普遍性を担保するデカルト、という構図を提示し、結論とする(=第9章、結論)。

本邦においては、研究者の間ですら定着しているとは言えない「存在-神-論」的構図を真正面から受けとめるとともに、これまた、本邦においては本格的な紹介すら存在しないクラウベルクの存在論の生成史的研究を遂行した上で、デカルト形而上学の構造と特質とを独創的な仕方とで解明する本論文は、デカルト研究、そして、近世哲学研究に大きく寄与するものとして高く評価することができる。他方、クラウベルクに関する本格的な研究が、デカルト形而上学の構造や特質の解明に全面的に寄与していると言い難く、クラウベルク研究とデカルト研究とが相対的に並置されているようにも思われる点、また、デカルト形而上学の解明の支えとなる『省察』その他のテキストの解釈に問題なしとせず、他のテキストや研究史の吟味による支えが必要とされるという解釈上の技法に関する不備など、もの足りなさはある。とはいえ本論文は、デカルト形而上学に対する、近世哲学史(研究)を背景とした新たな理解をよく示すものである。よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに値すると判断する。